宮井廃寺と辻岡山瓦窯跡

所在地：東近江市宮井町・宮川町

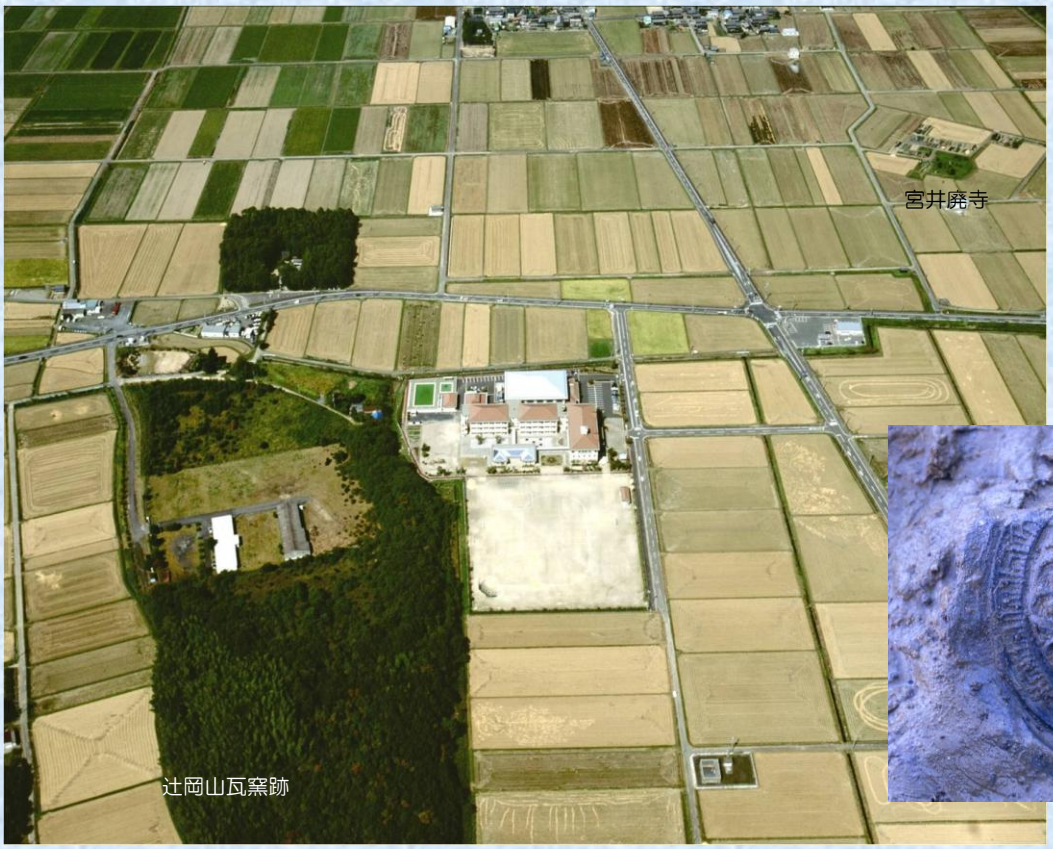
遺跡の概要

東近江市の南東部、日野川と佐久良川が合流する地点の近くに、7世紀後半の白鳳期の古代寺院跡である宮井廃寺があります。文献等には知られていない寺院ですが、金堂・塔・北方建物などの本格的な伽藍をもち、この地域の有力氏族が造営した寺院と考えられています。

また宮井廃寺から南東600メートルにある、辻岡山丘陵には、宮井廃寺に葺かれた瓦や須恵器を生産した、8基の瓦窯からなる辻岡山瓦窯跡が分布します。

宮井廃寺と辻岡山瓦窯跡は、寺院跡とその造営にともなって作られた窯跡がセットで残る、大変貴重な遺跡です。

↑ 宮井廃寺の塔心礎



← 宮井廃寺と辻岡山瓦窯（南東から）

↓ 宮井廃寺の瓦出土状況

宮井廃寺の伽藍

宮井廃寺は、南北地割が残っており、基壇状の高まりや塔心礎の存在から、古くから古代寺院の存在が知られていました。ほ場整備事業に伴い、昭和 55 年から滋賀大学が、昭和 56 年からは旧蒲生町教育委員会が合同で発掘調査を行い、遺跡の全貌が明らかとなりました。

宮井廃寺伽藍配置図

発掘調査では、７世紀第４半期から９世紀まで存続したと考えられる金堂跡と塔跡、創建時の建物ではないが、10 世紀末前後まで寺院として存在していたと考えられる北方建物跡、西方建物跡、鎌倉時代の墓などが見つかっています。

創建時の伽藍（がらん）配置は、南に塔、その北東に金堂が位置します。寺域は、溝の位置や、中心を塔跡とすると、一辺 150 メートルの南北地割の区画と考えられています。

金堂跡や塔跡の土や礎石には、火を受けた痕跡があり、堂塔は焼失したものと推測されます。

ほ場整備後の宮井廃寺の様子

天神社のある高まりの様子です。この奥に金堂跡があります。金堂の基壇は、東西長 16.72m、南北 11.68m、高さ現存 1m（推定 1.5m）です。

金堂東方の基壇下礎石の出土状況です。１間分のみ見つかっているため、金堂に上がる木階に伴う施設と考えられています。

塔跡の今の様子です。基壇の規模は、一辺 12.75 m、高さは 1.2m、礎石からは３×３間の塔が復元されます。

塔跡を西からみた様子です。礎石が 3 個なくなっています。塔心礎は新たに置き直されたものと考えられますが、７重塔に推定されています。

塔の心柱を支える塔心礎が、天神社の前に移動して置かれています。心柱を乗せる円形の孔の最大径は 71.5cm です。

北方建物跡は、周辺より一段高い畑に位置します。５間（12m）×4 間（8.8m）の建物が想定され、平安時代の建物と見られます。

西方建物跡の発掘調査時の姿です。乱石積の基壇の一部が見つかっています。中世のかく乱を受けています。

西方建物跡の南東に瓦が堆積しているのが見つかっています。中世の五輪塔や陶磁器などが瓦堆積を削平しています。

宮井廃寺出土の軒瓦

◀▼ 雷文縁複弁８葉蓮華文軒丸瓦

▲ 雷文縁単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦

▲ 単弁 12 弁蓮華文軒丸瓦

▲ 単弁 12 弁蓮華文軒丸瓦

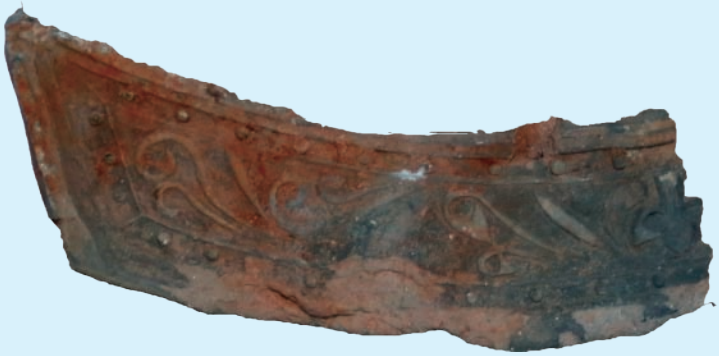
辻岡山瓦窯出土の軒丸瓦

◀ 単弁 12 弁蓮華文軒丸瓦
宮井廃寺では出土していません。

宮井廃寺で出土した軒丸瓦の中には、中央の蓮華文のまわりに「雷文」がある瓦が注目されます。滋賀県では、近江八幡市の千僧供廃寺から出土しているだけで、京都山城地域の古代寺院で多く葺かれる瓦です。

軒平瓦は、瓦当（がとう）面の下部分を指で押さえつけて波状にする指頭圧痕重弧文ものがあり、これは、湖東地域に特徴的な軒平瓦で、市内では、小八木廃寺（小八木町）で出土しています。

▲ ▼ 指頭圧痕４重弧文軒平瓦



▲▼ ▶ 均整唐草文軒平瓦

▲▼ 偏行唐草文軒平瓦

▲ 均整唐草文軒平瓦

辻岡山瓦窯

宮井廃寺から 600 メートル、宮川町にある八坂神社から 300 メートルの丘陵西裾部に８基の瓦窯跡が残ります。昭和 62 年～平成２年、平成９年に４基が発掘調査されました。

最も古いとされる１号窯は、全長９．８メートル、床面最大幅 1.8 メートルの無段式地下式窖(あな)窯と呼ばれる形の窯です。この形は、須恵器を焼くときの窯と同じ形とされ、１号窯では須恵器が出土しており、瓦と須恵器の両方が焼かれたことが分かっています。

２号窯は有段半地下式登窯で、焼成部が階段状になっていて、瓦を並べて焼いているのが残ります。

発掘調査風景
窯跡の傾斜は 20～50 度、幅は 1.8～2.2 メートル、深さは 1～1.76 メートルと。発掘も一苦労です。

１　号　窯　跡

１号窯須恵器出土状況

２　号　窯

３号窯は、全長 11.6 メートルと大型の地下式窖(あな)窯、４号窯は全長 12.2 メートルの地下式窖(あな)窯です。

１号窯は７世紀第四半期、２号窯は８世紀代、３・４号窯は１号窯に続いて操業されました。辻岡山では６世紀後半の須恵器窯があったことから、宮井廃寺の造成に必要な瓦を生産することになったと推測されます。

なお、辻岡山瓦窯では宮井廃寺では出土していない瓦も見つかっていることから、他の寺院へも瓦を供給していたと考えられます。

宮井廃寺の出土品

塑像は、焼成せずに主に土で形つくった像のことです。塑像は、7 世紀後半から作られるようになり、8 世紀後半にはほとんど見られなくなる、古い作りの仏像です。当時、寺院の中心となる仏像は、塑像であった可能性があります。出土したのは破片だけですが、菩薩像や四天王像、天部、神王像などがあったと見られます。

泥塔は、小型の土製塔で、24 個体が見つかっています。平安時代に泥土で多数の塔が作られたもので、全国的に出土する遺物です。

↑泥塔

←塑像

宮井廃寺周辺の遺跡

宮井廃寺のすぐ北側にある野瀬遺跡では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡が 17 棟見つかっているほか、大型の井戸などが見つかっています。宮井廃寺の寺域の西北にあたる地区からは、「口本寺」「寺」「中」と記された須恵器の墨書土器、「西一坊」「東一坊」「造佛」と記された灰釉陶器が出土しています。

宮井廃寺の北東に位置するアリヲヲジ遺跡では、奈良・平安の河跡が見つかり、ここでも墨書土器が出土しています。

宮井廃寺を造営した人物の居館跡などは見つかっていませんが、墨書土器や大型建物跡を寺院と関係するものと想定すれば、その影響は広い範囲にあったと考えられます。

蒲生堂遺跡（蒲生堂町）　掘立柱建物跡

野瀬遺跡（宮井町）　掘立柱建物

アリヲヲジ遺跡（蒲生堂町）墨書土器出土状況

野瀬遺跡　井戸跡

周辺の古代寺院跡

７世紀後半以降、日野川流域には宮井廃寺、綺田廃寺、蒲生堂廃寺、石塔寺、雪野寺跡などの古代寺院が知られます。

綺田廃寺は、稲荷神社境内を中心とする廃寺で、単弁八弁蓮華文の湖東式軒瓦が採集されています。稲荷神社境内では、古代の礎石が残っているのを見ることができます。

蒲生堂廃寺（蒲生堂町）は「嘉久堂」「大堂」「塔ノ堂」などの小字が残り、白鳳時代から平安時代前期の大型掘立柱建物跡が見つかっていて、寺院が造営された時期の遺構と考えられています。

石塔寺は、三層石塔が有名です。後補の相輪を含めた高さは、約 7.45 メートルあります。古代の日本列島では石の塔が作られていないことから、朝鮮半島の百済・新羅の石塔の系譜を引いて作られたとされています。

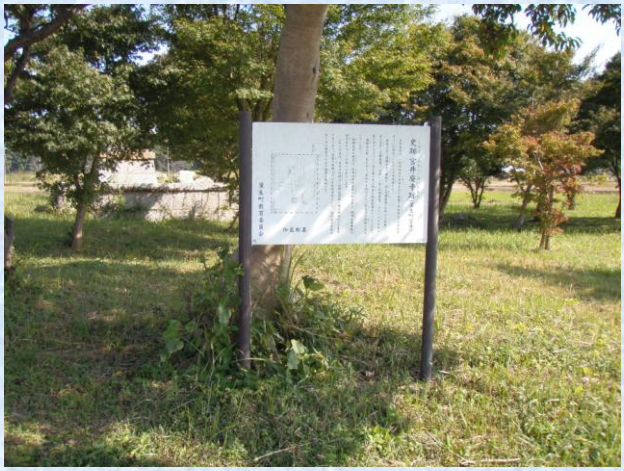
綺田廃寺　礎石　（稲荷神社内：綺田町・蒲生寺町）

石塔寺の三重石塔（石塔町）

★宮井廃寺へは・・・

アクセス
- 近江鉄道バス長峰線「蒲生堂口」バス停下車
- ちょこっとタクシー（予約制）
  蒲生エリア「外原」下車、東へ徒歩５分

蒲生堂口バス停からは、北へ行くと宮井廃寺に、西へ行くと河村化工滋賀工場があり、その裏が辻岡山です。辻岡山瓦窯の遺構は埋め戻されており、見ることはできません。



宮井廃寺の説明看板

東近江市の遺跡シリーズ 20 「宮井廃寺と辻岡山瓦窯」
編集・発行　：東近江市教育委員会　埋蔵文化財センター
〒521-1225　滋賀県東近江市山路町 2225
TEL：0748-42-5011　IP：050-5801-5011
FAX：0748-42-5816　［平成 29 年３月発行］
このパンフレットは国庫補助事業「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を得て作成しました。